

虹

虹

伊藤 整

中央公論社

虹

© 1962

昭和36年12月30日 印刷
昭和37年1月20日 發行

著 者 伊藤 整

發行者 栗本和夫

印 刷 凸版印刷

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋2ノ1

電話 (561) 5921 (10)

振替番號東京 34 番

定價 290 圓

虹

一

安藝重吉が會場に着いたとき、高原畫伯の還曆を祝ふカクテル・パーティーはもう始まつてゐた。千代會館の三階の昇降機を出たところに受けつけがあり、高原畫伯のマネジャーを兼ねてゐる弟子の山根が、タキシードをきちんと着て、別人のやうな感じでそこに坐つてゐた。そばにはもう一人弟子らしい青年がゐた。そこで署名をし、會費を拂ふと、山根は安藝を控室らしい細長い室を通り抜けて、本會場へ案内して行つた。

彼は入つてすぐの所に立つたまま、かなり廣い會場のあちこちに立つてゐる百人ほどの人々を眺めた。このカクテル・パーティーに集まつた畫壇關係者たちのうち、半数ぐらゐるが自分の顔見識りらしい、と彼は思つた。派手な感じの薄い紫一色の訪問着を着て、主賓の高原と、眞中のテールブルの角で立話をしてゐるのは、新進の女流日本畫家のう

ちで才能があるといふ評判の水谷曉子であつた。曉子の方を見ながら彼は、仕事のうまく行つてゐる人間は、表情に自信があり、大膽なものだ、と考へた。白髪にはなつたが、艶のいい顔をして、少し狡さうに見える鋭い目の高原は、その曉子に軟かい優しい笑顔で受け答へしてゐた。ふと高原は、誰かに見とがめられるやうな警戒の仕方で入口の方を見、そこに安藝重吉を見つけた。すると高原は、安藝が豫想してもゐなかつた鄭重さで彼に頭を下げた。言葉をかけるには少し距離が遠かつたが、その表情は、わざわざ來て下さつてどうも、と言つてゐた。安藝は、卑屈にならない程度でもつと鄭重に腰を屈めた。

安藝重吉は、自分が藝術家でもなく、また批評家でもなく、美術出版業者といふ商賣人であることを、かういふ席では忘れぬやうに氣をつけてゐた。顔を上げて見まはせば、彼の方から挨拶しなければならぬ人間ばかりがあたりに満ちてゐるやうなものであつた。彼は知人のそばに近つかぬやうにした。また話し込まねばならぬ人間には、遠くから頭を下げるだけにしておくやうに氣をつけ、なるべく知らぬ人間の近くに立つてゐた。

二三人の給仕たちが、素早い、しかし目立たぬ歩き方で、ウィスキーに水や炭酸水を割つたのや、二三種のカクテル

を盆にのせて持ちまはつてゐた。安藝重吉はその中から水割りウィスキーを手に取つた。何かを飲まねばならぬ。今夜は車を運轉して來てゐた。しかし今日の午後自分の起したことの不安が、彼の身のまはりに凝縮した空氣を作つて、彼を閉ぢこめてゐた。その固い氣持から少し樂になるために彼は酒に手を伸ばしたのだ。彼は水割りウィスキーを少しづつ飲みながら、内側が熱してゐる自分の顔に面をかぶつたやうな氣持で、壁に近いところに立つてゐた。彼のすぐ傍には、高原畫伯の縁者か何かに當るらしい七十ぐらゐの弱り切つた老人が、この室に四五脚しか出されてゐない安樂椅子の一つを占領して、じつと坐つてゐた。畫壇とか名聲とかいふものに無關係な人間の素朴な表情で、老人は自分の老齡をいたはつて椅子を占領してゐながら、それにおどしてゐた。

安藝重吉はその場所をちやうどいいと思つた。彼は言はば商人であり、かういふ派手な場所では、目立たぬやうにしてゐるのが禮儀でもあつた。だが、もし、この會場を歩きまはつて、畫家や批評家たちに挨拶し話しかければ、ときにはその中の誰かをぎこちなくさせるほど自分が重視される存在であることも彼は知つてゐた。カラーフィルムと多色印刷術の進歩が美術出版業者としての彼の地位を、父

の時代には考へられなかつた高いものにしてゐるのであつた。美術は複製によつて鑑賞されるのが普通になりかかつてゐた。一流畫家といふものは、文士たちと同じやうに、出版物によつて地位が定まり、やがては主たる収入も複製から得ることになる、といふ氣配を安藝重吉は近い將來に見通してゐた。

安藝重吉はじつとして、一時間前に甲斐弘子と自分との間に起つたことのイメージを、興奮と不安の混つた氣持の中で確かめ味はつてゐた。その出來事のイメージは薄いガラスでできた花のやうで、もし押しつぶされると粉々になつて形が失はれてしまふやうであつた。甲斐弘子と彼との間に起つたことは、自然の花のやうではなかつた。薄い半透明の人工のガラスの花に似てゐた。半年ほど前に安藝がヴェニスの裏町の硝子細工の工場で見た皺だらけの頬をした老熟練工が、鐵のバイブの先で吹いた軟かいガラス玉を、細い鐵のヤットコでひねつたり、押しつけたたり、伸ばしたりしながら、瞬く間に作つて見せた桃色の薄い花瓣を持つた薔薇の花に似てゐた。

そのことの起つたあとさきの事情を、内側から湧き立つやうな不安定な氣分のなかで、確かめるやうに描き直してゐた。さういふことが彼と甲斐弘子との間に起りさうな氣

配は前からあつた。しかし、自分はもう女性とのさういふ事件は起きないだらう、と彼は思つてゐた。結婚してから十年あまりの間に、彼は三度妻の容子を裏切つた。そこまで行かないやうな火遊びめいた女性との近づき方は、もつと度数が多かつた。その三度のうちの二度は容子に感づかれた。その度に容子はひどく傷つき、苦しんだ。その容子の苦しみのために彼もまた苦しんだ。妻をこんなに苦しませてまで自分はよその女に引かれる氣持を斷ち切ることができないのか、と安藝重吉は幾度か自分の心の中をのぞいて見た。彼の心の中は暗い洞穴のやうであつた。それは解答を與へず、いつまでも満たされないままでゐる暗い男性の渴きといふものを感じさせた。おれの仕事が良くないんだ、父の作つた土臺の上に立つてゐるおれの仕事は、本當の満足をおれに與へてゐない。そのせゐだ、と彼は思つた。この三年のあひだ彼を善良な夫にさせておいたのは、妻の苦しみを再び見ることの怖れであつた。妻への愛といふものとはどこか違つてゐた。それはむしろ自分の心の平安のためであつた。自分になまなましく應へる妻の苦痛の記憶が、彼をすべての女から押し隔ててゐたのだ。だから甲斐弘子との間に何事かが起りさうなのを豫感し、期待する氣持が次第に高まつて來てゐても、自分はさういふことを

起さないだらう、起し得ないのだ、といふ、諦めに似た安堵感がいつも彼の中にあつた。その安堵感は透明なプラスチックの袋のやうに彼を包んでゐた。自分が手を伸ばして、外界にゐる女たちに觸れる氣づかひはなかつた。それに仕事の上でしよつちゆう逢つてゐる弘子にも觸れるはずがなかつた。彼は日常の仕事の間に多くの女たちに逢つてゐて、絶えずその美しい顔、姿、粧ひを見、彼女等に話しかけ、彼女等に反應してゐた。しかし彼女等は、彼を包んでゐるその透明な袋に觸れ、衣摺れの音や笑顔をかすかに残すだけで通り過ぎた。彼女等は彼の身近にゐながら實在しない女性たちのやうであつた。そして彼の日常は、計算し、應接し、交渉する仕事の連續と、家庭で容子や子供の明と食事をしたり、日曜日に自分の車で妻子を連れて出掛けたりする生活以外には、何の變つたことも起らなかつた。人妻であつた栗須葉子との情事が終つてから三年経つてゐた。三年は長かつた。そして今の當り前な生活が彼には次第に息苦しくなつて來ていた。彼は妻と子を妻と子として愛してゐるにかかはらず、家庭といふものを好きになれなかつた。しかし容子は、彼が家庭を厭がることを知り、それを彼が妻を愛してゐないといふことに受け取つてゐた。その容子の前で彼は本心を吐き出すことができず、靜かに

家庭の中に、息も絶え絶えにをさまつてゐた。

その透明な、胎児を包んでゐる薄い膜を思はせる包みが今日破られたのであつた。彼があゝの閉められた白い襖の前で、立つたまま弘子を抱き寄せたとき、彼が感じたのは、弘子の魅力に負けたとか、彼女への愛情がおさへ切れなかつたといふ氣持ではなかつた。彼が自分を包む透明な袋を破つて出たといふのが、その實感であつた。そして彼の手に抱かれてゐる弘子の髪、弘子の背中、彼の唇がふれてゐる濡れた弘子の唇と齒のかちかち鳴る音を通して、外界の新しいさわやかな空氣が自分の存在のまほりを流れはじめたことを感じ、また外の世界にゐた弘子といふ女性が自分の觸覺の中の實在になつたことが確かめられたのであつた。

それは弘子に觸れることによつて破られたのだ。弘子は彼のまほりに、谷川のせせらぎで洗はれたやうな新鮮な空氣を吹き込んだ。弘子の唇には洋菓子やうな甘い匂ひがただよつてゐた。それは弘子の簡素なスーツの襟についてゐる白い細かな刺繡の飾りから匂つて來るやうでもあつた。弘子の唇は、彼の唇に押されて頼りなく開き、齒がかちかちと觸れ合つた。それ以上弘子は、彼の唇や舌での感覺的なたはむれに應じようとせず、ただ彼の厚ぼつたいホームスパンの上衣の背に手をのばしたままそれに力を込めてじ

つとしてゐた。

そしてもうその時から、安藝重吉の不安は始まつてゐた。その新鮮な空氣の流れが、そのあとに續く冷たい、暗い、女性全體の狂氣のやうなもの、襲來を予感させた。それはまた始まつたのだ。それが始まつた以上、彼の世界には不安と怖れが呼び起されずにゐることはなかつた。しかし弘子の心持ち赤い髪、白い額、切れの長い目の動かない瞳は、いま彼の腕の中にあつた。一年以上もの間、彼の心に焼きつけられてゐたその美しい姿を、腕の中に感じてゐるといふ喜びに彼の心はをのいてゐた。

そこは彼の事務所、安藝出版社の三階の和室であつた。

一階は倉庫兼發送部、二階は編輯室で、それぞれ五十坪ほどの面積があつた。三階には參考資料をまとめてある大きな圖書室の外に、安藝重吉が自分だけで使ふ洋間の書齋と、時々寢泊りもする十疊の和室があつた。

その日安藝重吉と弘子は、彼女の父甲斐青洋の畫集の解説をすることになつてゐる美術批評家の關直助の來るのをその書齋で待つてゐた。約束の時間が一時間以上も過ぎた。二人の間の低い卓には、製版のできた分の校正刷りが並べられ、また弘子の作つてゐる父の年譜の原稿が置かれてあつた。さうして、弘子と二人きりで坐つてゐる時間が續い

てゐるうちに、安藝重吉は時間といふものが厚い濃厚なゼラチンのやうな實在に思はれて來た。ときどき弘子の白い手が校正刷りを裏返しに窓の方に持ち上げた。圖柄を確かめるためである。しかし安藝には弘子が必要もないのにさういふことをしてゐると思はれた。何かが迫つて來てゐる。それを避け、それに氣づかぬ振りをするのがこの弘子は下手なのだ、と彼は思つた。

「この赤は山際さんのあの繪のやうに行くといひんですがね」と言つて、安藝は靴を脱ぎ、座敷の壁にかけてある山際清の繪の複製の前に立つた。弘子がだまつて彼の後から上つて來て、座敷に入ると襖に手をかけ、何氣なくそれを閉めた。それを安藝はちらと見た。この人の習慣だ、と彼は思つた。しかし弘子は、自分がわざとのやうにそれを閉めたことにすぐ氣がつき、その顔色がすうつと蒼ざめたやうだつた。その顔を安藝が見てゐた。弘子が襖に近づき、また襖を開けようとした。

「いや、構ひません。」

その言葉で、安藝は彼女の不安をなだめようとした。しかしその言葉は、二人の間に登りつめて來てゐた緊張を實在化した。襖を開ける彼女を留めるかのやうに、でなければ弘子を連れて來ようとするかのやうに安藝が彼女の方へ

二足三足近寄つた。そのとき弘子が兩手を前に出して安藝を防ぐやうな身振りをした。安藝はその身振りに招き寄せられたやうに、もう一步近寄つて彼女の肩に手をかけた。もう避ける道はなかつたのだ。今は、この場合は、かうする外なかつた、と彼は絶望的に感じた。

抱いたまま唇を離すと、彼は弘子の耳を髪の中から自分の唇で探り出すやうにして、小聲で囁いた。

「弘子さん、好きな人があるのではなかつた？」

「いいえ、私、さういふ人がなくなつて、淋しいんです」と低い、はつきりした聲で弘子が言つた。その言葉は弘子がいま衝動的にさうしてゐるのでないことを語つてゐた。彼女の手はまだ彼の背中にまはされてゐた。

「よそで君に逢ひたい。」

彼がさう言つて、弘子の頭がうなづいたとき、その髪の毛は安藝の唇にふれながら揺れ動いた。

二人はまた書齋の椅子に戻つた。關直助から、來られないといふ電話が間もなくあつた。

椅子に坐つたままでゐる弘子の表情は靜かであつた。ただ睫毛は伏せたままだつた。私はかうする外なかつた、とその表情が言つてゐた。

「僕はずるぶん長いこと、これを避けて來たのですが」と

安藝は低い卓越しに低い聲で言つた。

すると弘子は、上目づかひに彼をちらと見て目を伏せた。私も、とその目は傳へた。この人は、靜かな表情のまま、何事でもする氣でゐる、と思つたとき、安藝の身體を、ほとんど性的な快感に似た喜びが走つた。それは人工的な、細心な抜ひを必要とする情事のはじまりを思はせた。二日後の午後二時に銀座裏のレストランで逢ふ約束ができた。

弘子は、洋畫壇の老大家の甲斐青洋の末娘であつた。安藝重吉は前年の夏から甲斐青洋の畫集の編纂を企ててゐた。諏訪湖のほとりの山の斜面に構へた温泉つきの山莊から動きたがらない青洋のところへ、安藝は何度か足を運んだ。

安藝重吉は、重要な仕事を始めるときは、難かしいところは自分ですつかりまとめ、事務的な處理だけを社員にまかせる習慣であつた。諏訪の山莊で彼は青洋の末娘の弘子を紹介された。弘子は無口でほとんど無表情なのに、その目の動きだけで羞みと同時に素早い頭の働きを示すのが、安藝の心を引きつけた。化粧しないままで膚の白さと姿の美しさとを見せてゐるこの娘は婚期を失ひかけてゐた。それは、偉大と言つていいこの老藝術家の末娘に生れたその境遇の重さを語つてゐるやうであつた。

安藝は青洋の紹介狀を持つて、何軒かの畫廊や愛藏家の

ところを寫眞屋を連れて寫して歩いた。その仕事が終りに近づいた秋の末頃、彼は甲斐弘子の訪問を受けた。青洋は、その畫集に入れる作品を變更したい、といふことであつた。初期のものは一つの作風ごとに三點づつ取つたのだが、甲斐青洋は、三十歳を過ぎて自分の作風の確立してからのものを多く生かして、初期のものは全部で三點ほどに減らしたい、といふ意向であつた。

そのときから安藝重吉と弘子の接觸が始まつた。青洋が今度畫集に入りたいと思ふ作品の中には所在の分らないものもあつた。またやつとその行方を突きとめると、ひどく損じてゐて、使ひものにならぬものもあつた。一應それ等をまとめて色彩寫眞に取り、青洋に見せてまた相談した。ほとんど畫壇から隱退してしまつたこの老人は、頑固な上に氣が變りやすかつた。作品の選定ばかりでなく、解説を書く批評家の人選にも氣難かしさを示し、仕事はまともりかけてゐながら、いつまでも最終的な決定を見なかつた。そしてその間ちゆう甲斐弘子は諏訪の山莊と東京を往復し、澁谷の姉の嫁ぎ先を足だまりにして、安藝出版社にしばしば顔を出すやうになつた。

今日から、おれはまた心の平安を失ひはじめるのだ、と、水割りウィスキーのグラスを手を持ちながら、安藝重吉は、

自分の心に言ひ聞かせた。だが彼は怖れてゐたほど滅入つた氣持にならなかつた。他人の妻である栗須葉子と身體の交りを持つてゐる間ぢゆう感じたあのうそ寒い、滅びに向つて歩いてゆくやうな犯罪者的な不安は、いま彼の心になかつた。そして甲斐弘子の白い額、大きく見開かれる切れの長い目、それから少し乾き氣味でいつもかさかさになつてゐるルージュを塗らない唇、形のいい脚などを彼は思ひ出した。弘子が靴を脱いで座敷に上つたとき、踵の高い靴を穿いてゐる癖で、あの襖の前で彼女は爪先立ちしてゐたことまで彼は目に浮かべた。何かを言ひ、何かの意味を表情するときも、彼女はもう一つ別な心を取つておいてあるやうな靜かな目をした。それは、冷たい張りつめた心であるやうに見え、時としては何か湧き上る心を押さへてゐるやうでもあつた。

安藝重吉が弘子に心を惹かれたのは、さういふ一種の性格の嚴しさが、その顔や姿に漂つてゐることであつた。それは彼の知らない弘子の過去につながつてゐるのかも知れず、また破滅と分つてゐるやうな仕事に生涯を賭けたその父の性格を繼いでゐるのかも知れなかつた。そしてそれはまた、甲斐青洋の湖や山を描いた具象畫に漂ふひっそりとした嚴しい雰圍氣に似てゐた。

弘子が、畫集編纂の方針を變へたいといふ青洋の手紙を持つて安藝出版へ訪ねて來た日のことを彼は思ひ出した。そのとき安藝は、弘子を三階の書齋に待たせたまま二階の編輯室で編輯主任の奥井道太と相談してゐた。奥井は、編輯方針の決定した甲斐青洋畫集を、もうやり直せないからと言つて、そのまま出版することを主張した。それはちやうど甲斐青洋のイタリアの展覽會に出した繪が賞をもらつた時で、奥井はこの機會に出さねば賣れないといふ説だつた。安藝はそれをなだめ、會計の宮崎徳一を呼んで、印刷所の支拂ひや大取次との金繰りの都合を問ひ、甲斐青洋の希望を容れて豫定を變へることにやつと決定した。弘子を待たせたまま一時間以上もかかつて彼がその話をまとめた。三階へ上り、書齋の扉を開けるや否や、弘子はすつと立ち上つて、彼をまつすぐに見つめたまま、

「安藝さん」と短く言つた。

彼女は理由を告げられずにあまり長く待たされたことを侮辱と感じたやうであつた。安藝は黙つて扉を閉ぢ、彼女にもう一度座に就くことを願つて、事情を説明しはじめた。

もともと、甲斐青洋の畫集出版は、利益を度外視した彼の道樂仕事であつた。青洋は高原古實のやうな展覽會の審査員とか藝術院の會員などといふ社會的地位や經歷のない

素人畫家であつた。もと彼は南信の大きな地主の息子で、

一時代前の前衛的な畫家たちのバトロンのであり、若い畫家たちに取り巻かれて、藝術的な雰囲気を楽しみ、言ひなりに畫を買つてやる美術の鑑賞家に過ぎなかつたのだ。その青洋が三十歳を過ぎてから突然繪を描き出した。山林經營や製材の家業は弟に譲り渡し、諏訪湖を見下す山の斜面にアトリエを建ててそこに引き籠つた。そして彼は、以前彼が繪を買つてやつた畫家たちに輕んぜられながら、季節ごとと若干の集まつてゐる展覽會に出品し、義理のやうに一點か二點づつ入選させてもらふやうな生活を二十年續けた。甲斐青洋の繪は進歩しなかつた。安藝の亡くなつた父はよく、あれは旦那藝の見本だ、と言ひ、さういふ馬鹿な立場に陥らぬやうにと息子の重吉を戒める材料にした。甲斐青洋は、どうしても當時の流行のフランス風のモダニズムの繪を描くことができず、竹田を油で描いたやうなものばかり描きつづけてゐたのだ。その間に彼の庇護した昔の前衛畫家たちのうち、極く少數のものだけがまともな畫家となり、それより少し多くのものは名を成して俗物と化し、大部分のものは行きづまつて脱落した。時代の變り目が來てゐた。

甲斐青洋が五十歳を過ぎた頃から、批評家の新しい層が

現はれた。それ以前の批評家たちは、いつまでも彼を金持ちの旦那藝としか見なかつたが、この新しい批評家たちは、甲斐青洋の繪に日本的な造型法と洋畫手法との最も効果的な結びつきを見出した。更に戦争後には、ヨーロッパやアメリカの畫壇で日本美術の再認識が盛んになつた。ヨーロッパ流の繪に成り切れなかつた青洋の作品に注目が集まつた。そして、海外の展覽會に出品する機會が彼に與へられた。安藝重吉が青洋の繪に關心を持つたのは、その少し前からで、自分の所で出してゐる美術雜誌『藝苑』に何度かその作品を紹介し、三四點を畫商の手を通して買ひ取つてゐた。

安藝重吉は青洋の作品そのものが好きだつた外に、甲斐青洋の生き方に、子供じみた共感を覺えたのだ。それは、畫家たちの庇護者といふ、最も重寶がられながら最も輕視される存在から眞の藝術家になるといふ、藝術の世界では極めて希な例を實現した點においてであつた。そして安藝重吉自身の仕事も、美術印刷とその出版といふ點で、藝術家たちの庇護者か畫商に近いものだつたのだ。その上、彼にもまた詩を書くといふ妄執があり、大學の文科で同人雜誌と一緒に出してゐた時以來の友人酒匂光と協力し、自分のポケット・マネーで小さな詩の雜誌を出し、それに詩を

書いてゐたのだ。

安藝重吉は、父の仕事がこの出版社に侮辱されたとしてもいふやうな弘子の険しい態度に氣押されるやうに感じながら、彼自身の青洋の作品への傾倒の眞剣さと、出版業といふものの計畫性や經濟的な事情などを手短かに話し、自分としては、青洋先生の意志にできるだけ添ふつもりであるのだ、と言つた。

弘子は、彼が話し終へると、

「分りました」と言つて、彼の方に大きく開いた目を向け、ゆつくりと一度目ばたいた。その目ばたきは、彼女の思ひちがひと非禮を自ら認め、それを恥ぢてゐることを安藝に傳へ、また安藝に對する彼女の新しい信頼感をも傳へる役をした。そのあと黙つて弘子に向ひ合つてゐたとき、安藝は急に胸の迫るやうなバセチックな氣持に陥つてしまつた。少し困つたやうに兩手を揃へて膝に置いてゐる弘子もまた同じ氣持であるやうだつた。そのときから安藝と弘子は、ほとんど説明し合ふことなしに、短い言葉だけで意志を通じ合ふやうになつた。

あの時から自分と弘子は相手を身近な人間に思ひ込んでゐたのだ。そして何かが起る可能性が、いつも黙りがちな二人の間に漂つてゐたのだ。それを自分は輕いことに考へ

て、今日のやうなことに直面するまで不用心でゐたのだ、と安藝重吉は考へた。

高原古實のそばを離れた水谷曉子は一度室を出て行つた。しばらくして戻つて來たとき、曉子はふはつとした甘い香水の匂ひを漂はせて安藝重吉のそばへ寄つて來た。そして娘らしく、輕く

「こんにちは」と言つた。三十歳を幾つか過ぎた曉子にはその子供つぽい言葉が少し似合はなかつた。それから彼女は、その首の細い、ちよつと寫樂の繪のやうな顎の張つた目の細い顔で、安藝の方をのぞき込むやうにして言つた。「私、知つてるわ。安藝さんは詩人だつたのね。何て言つたかしらあの雑誌、あの『天の蛇』といふ名の酒匂光さんとの二人雑誌を見たわ。」

安藝重吉の顔がほてつて來た。それは急所に不遠慮に觸られた動物の怒りに似た氣持であつた。

「いや、『天の龍』です。あれは學生時代からの友達でしてね。私のやうな人間は、人さまの役に立つものであれば、頼まれれば何でもするんです。本や雑誌を作るのは商賣ですし、酒匂に頼まれると、雑誌を作り、埋め草の原稿も書くといふ次第で、まあ資本家兼引き立て役ですな。」

「さうでもないと思ふけどな。」

水谷曉子は安藝をからかつてゐるやうに取られるのを警戒し、次の言葉をためらつてゐた。その女らしい軟い氣配に彼はかすかな嫌惡と冒險心のときめきを感じながら考へた。美術出版を業としてゐる彼には、女性に近づく機會が多かつた。それは彼の經營してゐる『藝苑』が繪や彫刻の評論雜誌として權威を得るにつれて、その雜誌での取り上げかたが新進の畫家たちの地位を左右する傾向が見えはじめてからのことであつた。さういふ力を今の美術雜誌が本當に持つてゐるとは彼は考へなかつた。しかし世に出ることを焦つてゐる若い藝術家の激しい競争と嫉妬の中では、ちよつとした編輯上の扱ひの差が決定的な打撃と考へられるほど、若い畫家たちは神經質であつた。特に若い女の畫家たちの嫉妬や、弱氣の拗ね方や、厚顏な自己宣傳などを、安藝重吉は時として痛いやうに感じてゐた。

そのために、彼は女の若い畫家たちの彼に見せる親愛感や甘えなどを素直に受け取ることができなくなつてゐた。そんなに過敏にならないで、仕事の質を高めるか、少くとも仕事の中に人間的な迫力を出せる畫家でなければ結局はものにならないことを彼は知つてゐた。おれに近づくかとするのは非力な甘つたれの女畫家たちなんだ、と彼はさういふ機會がある毎に考へた。水谷曉子はもつと利口であつ

た。しかし利口な、自信のある女流畫家には、またその弱點があつた。藝術の商賣人である安藝を本質的に軽く見てゐる氣持を彼女はできるだけ隠さうとしてゐるのだ。それが彼女の慣れ慣れしい友達言葉になつてゐた。

すぐれた素質の畫家たちは、自分の力についての自覺を持つてゐて、畫壇の表面の渦を追ひかける泡沫のやうな動き方はしなかつた。才能のある水谷曉子の自信のある樂な動き方と、焦つて時の流れを追ひかける弱い女流畫家のやり方とはその外形が似てゐただけである。この寫樂の繪のやうな古典的な歪みを帶びた顔をした女流畫家が、藝術の商賣人としてのおれを輕んじてゐるのはゆるせる。しかし、この女までおれに諂ふのを見るやうな目に逢ひたくないものだ、と安藝重吉は思つた。

「私ももと詩を書いてゐたんだ」と水谷曉子が言つて、聲を出さず、にやつと笑つた。二本の黴が、青白い皮膚が骨骼に貼りついたやうなその顔の、口の兩隅に現はれ、紅色の口の中に舌のさがちらと見えた。聲のないその笑ひはぬるりとして、女性の身體の祕密な部分を思はせた。安藝重吉は氣持を切り變へた。彼女は惡戯つ子のやうな打ちあけ話をしてゐるだけだ。

「繪をはじめる前に？」と彼がその顔でなく、その言葉の

方を受けとるやうな目をした。

「だけど、私、觀念が幼稚なんだ。やつぱり女だから、色と形のおしゃれを、自分の顔でなく、紙や布の上に生かした方がやり甲斐があると思つてね。」

「ふーん。」

安藝重吉は隣の安樂椅子に、誰にも構はれず、話しかけられずにじつと坐つてゐる老人の髪のままらになつた頭の地を、醜いものだと思ひながら見てゐた。

「どうも今夜はわざわざありがたう」と彼のうしろで聲がした。振りかへると高原古實であつた。安藝は高原の黒い射るやうな目を見た。そして、遅れて參着したことを詫び、型どほりの祝辭を述べた。

「甲斐さんの畫集をやつてゐるさうですね。うまくはかどつてゐますか？」と高原が言つた。現代畫家の主要メンバーを並べた全集形式ならば他にも例があるが、個人の代表作集の贅澤版を出すことは、時代を代表する少數の畫家だけに與へられる最大の名譽であつた。安藝がさういふ個人畫集の大判の高價な畫集を出すのは、甲斐青洋で三人目であつた。自分で自分の存在を賑やかしてゐるやうな高原はまだそのクラスに入つてゐなかつた。

「古い作品を追跡して集めるのに骨を折つてゐます。それ

に甲斐先生がなかなかの氣難かし屋で」と彼は仕事の難かしさを自分の身に振りかかつた災難であるかのやうに説明した。繪の所有者が持ち出しを厭がり、しかも寫眞を撮る條件が一つづつ違ふ。日本の印刷術はバリやフイレんツエの美術出版に劣らないが、カラーフィルムの發色が甲斐を満足させない。さう説明しながら、安藝重吉はまたしても不安な氣持に落ち込んだ。自分はこの青洋の娘の甲斐弘子との間に起つた事件に煙幕を張つてゐるやうだ。自分と甲斐弘子とのことが、喋れば喋るほど露骨にそこに現はれるやうな氣がした。喋ることで弘子との事件から來る不安をまぎらさうとすることが無駄だ、と思つた。彼は言葉を滑らせて、甲斐青洋だけでなく、その仕事に當つてゐる娘さんまでが氣難かしいので困つてゐる、などと言つた。そのとき高原古實は、笑ひながらまた射るやうに彼の顔を見た。ひよつとすると、おれが弘子に心を惹かれて、この仕事をできるだけ延ばしてゐるといふやうな噂がすでに行はれてゐるのかも知れない。彼は脅えるやうにさう思ひ、すぐにその弱い心を打ち消した。

還暦の會は最後に、高原古實に赤いチャンチャンコを着せ、赤いベレー帽をかぶせて拍手し乾杯することで終つた。安藝重吉が千代會館の表へ出たとき、霧のやうな冬の雨が

降つてゐた。車をパークしてあるところまでは角を一つ曲つて歩かなければならなかつた。表口で自分の車の運轉手やタキシを待つて立つてゐる客を分けて出ようとすると、薄地のコートを着た水谷曉子の後姿が雨の光る街頭の逆光の中に見えた。

「水谷さん、待つていらつしやい。いま車を持つて來て送つてあげます」と彼はその耳もとで言ひ、返事を待たずに歩き過ぎた。曉子のはしやいだ聲が彼の背後で言つてゐた。

「あら、さう、助かるわ。」

安藝が車を歩道の縁に留めると、黒い人の群の中から曉子が走り出して來て、彼の横に坐つた。

「誰かゐませんか、外に乘りたい人？」と安藝が言つた。

「いいわよ、行きませうよ」と曉子は人の群を振りかへつて見た。それは知人を搜すといふよりは、誰か同乗させるのを厭がつてゐるやうな感じであつた。

「どちらですか、お宅は」と車を走らせながら安藝が言つた。

「私のどこ？ それよりもあなたどこかに行きたいんですよ？ 私、勝手なところで下して頂くわ。」

「さういふ人が一番困るんです。」

曉子が聲を低くして笑つた。交叉點で青と赤のシグナル

が切りかへられ、濡れた路面にそれが反映し、東京の夜を埋めてゐるネオンサインの雑多な色と混ざり合つた。安藝はクラッチとブレーキを踏み分ける心配りが、曉子との會話よりも一段沈んだ心でしなければならぬのに氣がついた。酔つてゐるのでないとしても、自分がふだんと違ふ氣分であることが分つた。さういふとき、運轉に氣をつければならなかつた。彼は無口になつた。

「安藝さん、急いでいらつしやる？」とそばで曉子が前方を見ながら言つた。

「いや、そうでもない。どこかへ寄りますか？」

「ええ。」

「もつとも今日は車を持つて來てゐるから僕は飲めませんよ。」

「いい、私がいただくから。」

酒を飲む場所へ行けば、今日の自分の異常な緊張感を少し解きほぐすことができるかも知れない、と彼は思つた。

安藝は曉子を連れて「まなづる」といふ中ぐらゐのバーへ行つた。先客が立つたばかりの隅の空いた席に坐つた。係りの女は言ひつけたジュースとジンを運んで來たが、安藝と曉子がいつまでも黙つてゐるので、外の席へ移つて行つた。